

## 第5章 私はかように弓と矢を発明した、 ロジャー・コーマン監督によって

—造化の神が弟子まかせにして造らせた、それもまるで出来損ない、  
あれは人間の姿じゃないよ、化け物だよ。—

私たちの乗ったバスはフォートオードに暗くなってから到着しました。私たち新兵はその夜、バラックのようなところ入れられ、下着のままで眠らされ、私は慣れない北カリフォルニアの天候に、寒くて、寒くて堪りませんでした。

夜明け前に、私達は凍った練兵場にせき立てられ、きちんとした二列を作るまで下士官たちに突っつかれました。

大きな意地悪そうな顔をした一番壊そうな軍曹がついに叫びました、「お前たち声を出せ！」

そして、言われるままにそうしました。その日の朝、初めての朝食の後に知ったのですが、私たちの基礎訓練は、訓練を担当する下士官・士官ともにクリスマス休暇のために留守で、来年まで行われないとのことでした。軍曹は、彼らが戻ってくるまで、私たちはG Iの制服を支給された後、2週間は徹底的な清掃をしてその区域を磨き上げるのだと言いました。

私がL.A.を立つ前、ビバリーロング、LACCの時から友人（彼女は「理由なき反抗」にも出演した才能ある女優）がフォートオード、では私が俳優であることを、誰にも言わない方が良いとアドバイスをくれました。それはただ単に私に災難をもたらすだけだろう、ということでした。私は陸軍基地にそのことを心の中にしっかりと刻んで到着しました。そしてビブの助言は充分もつとものように聞こえました。同室になったのは、ほとんどがモンタナから出身の粗削りな牧羊者たちでした。彼らの中では、ハリウッドのめめしい男は分が悪いだろうと、感じました。

キャンプでの初めての日曜日の時間をつぶすため、私は、何か読む物を探し

売店に行きました。

驚いたことに、店には最新のファン雑誌が全部揃っていました。私は2・3冊購入して宿舎へ持ち帰りました、最近の業界のゴシップに少しは追いつけるかと思ってです。そのうちの一冊を開けるや否や、ナタリーと私の写真に出くわしました。彼女はメンフィスからの飛行機から降りて来て、私は手に一杯のぬいぐるみを抱えて彼女を待っているところでした。私はすぐにその雑誌を閉じて、周りを見渡し、私の下段ベッドのマットレスの下に押し込みました。「やれやれ、危ないところだった」と思いました。

そして、昼食の時間になりました。私が戻った時、とても恐ろしいことに、彼らとその雑誌を手にとって笑いながらめくっているのを目撃しました。私のマットレスは明らかに動かされていました。そんな簡単に見つかってしまうところに隠すなんて、私の大学教育で得た聡明さもおしまいです。

私は自分のベッドで腕を頭の後ろに組み、上段を見つめながら、次にどうなるのか想像もつかず、恐れながら横たわりました。彼ら仲間のリーダーと思われる男たちが雑誌をまわし、それを見て、そしてそれぞれが私を思案気味に見ました。そしてついに、彼らリーダーが私のところへやって来て、しげしげと見つめ、二人のうちより怖そうな顔をした方がものすごい小さな声で写真を指しながら「これはあなたですか？」と尋ねたのです。

「そうだよ」私は潔く認めました。

彼らは歓声を上げ、互いの背中をたたき合いました。

私たちは話しを始めました。そして、夜、牧羊場で何もすることが無い時、私の同室の仲間たちは、彼らのためにアンテナを工夫して備えられた小さな白黒テレビを見て過ごしたのだ、ということを知りました。彼らは私の初期のころのTV出演番組のいくつかを、見ていました。中でも、「ガンズモーク」の1956年のあるエピソード「クーター」は彼らのお気に入り、私が覚えているよりも、はるかに良くストーリーを覚えていました。

一人が私に、「マリリン・モンローとやったことあんのかい?」、そんな風に発音しながら尋ねました。私はやったことはないけど、そうできたら良かったと思っていると答えました。彼らはそれは素晴らしいと思ったようで、一気に絆ができ、クスクス笑いや大声で笑いだしました。私は西部劇スターの男ら

しさについて聞かれるものと思っていましたが、それは一切きかれませんでした—多分誰も女っぽい男“デューク” ウェインなんて想像もしなかったでしょうから。

ともかく、ハリウッドの変な奴と思われるよりも、私はすぐさま大空の地からやってきた私の新しい仲間たちに、尊敬する「兄弟」として受け入れられました。一方私は、8週間の基礎訓練を一番の兵士になるべく努力し、自由時には基地の図書館に足しげく通って過ごしました。私のゴールは、私の2年間の兵役が終わる前に、なんとか抜け出す合法的な方法を探し出すことでした。

はじめの4週間の終わりに、私たちは土曜日の昼から日曜日の午後5時まで、家に帰ることを許されました—私たちの初めて訓練から解放でした。此のつかの間の自由という私の幸せはすぐに衝撃に取って代わられました。私がいないうちに、母がバーガー氏病、あるいはネフロパシー、尿中の血液を特徴とする腎臓疾患と診断されていたのです。治療を受けなければ、足の切断も余儀なくされるか、または腎不全、死に至ってしまうかもしれませんでした。

私は母に、最善の治療を受けれるようにすることを約束しました。私たちはその週末を互いに同情し合いながら過ごしました。そしてゆっくりとですが、次第にこの奇妙な私たちの人生にのしかかってくる新しい現実—死という考え—に慣れてきました。日曜日の午後、私は自分をそこから引き離すようにして出発しましたが、最初に家を離れる時よりももっと辛いものでした。

フォートオードにもどり、私は毎晩夕食のあとに、私が「名誉ある苦難による除隊」の資格がないかどうかを調査して過ごしました。どうあろうと、バーガー氏病により働くことの出来なくなった母をサポートするのはもう私しかないのです。

1957年3月の基礎訓練の終わりに、私は同僚と一緒にワシントンのフォートルイスに送られる代わりに、フォートオードに残されました、早期除隊を申請し、保留中であったからです。一方、私は3年間の予備軍での実績があったため、当面の訓練教官に、あるいは「キャドリ」と軍はその仕事を呼んでいましたが、任命されました。私は、リクルート・オブ・ザ・サイクルとも呼ばれました。

私の「エンド・アズ・ア・マン」で精神病の士官を演じた経験は、この新しい役割、新しく任命されたばかりの訓練教官役、に非常に役に立ちました。白いヘルメットをかぶり、ブルーアスコット、完璧にのりづけされアイロンがかけられたグリーンユニフォームを着、偽の南部アクセントで装えば本物との違いはわかりません。そして、ドリルインストラクターであることは、結果として笑えるくらい簡単なことになりました。それはまた同じ8週間の基礎訓練をやることだったのです、ほとんど後ろ向きにですが。私の新兵たちが前に走っている時に、私は後ろに走り、彼らを激励するのです。しかし、私の一日はとても長いものでした。私は皆よりも一時間早く（4時半）起きなくてはならず、そしてライフルの棚を夜の十時になってもまだチェックしていました。早く除隊したいという願望はさらに強いものになりました。

自由は、ついにジョー・フリンのお陰でやってきました。ジョーは、南カルフォルニア大学で、当時のハリウッド地区の議員をやっていたジョー・ホルトと、友人になっていました。フリンは、私の早期除隊の嘆願に、政治家の力を借りる道を探したのです。私は今でもホルト議員からの2通の手紙を持っています。最初の手紙は願いを叶えられなかったことに対する謝罪の内容、そして2つ目は、陸軍除隊を祝福する内容です。「この件に関して私がお役に立てたであろうことを願っております。」と加えられていました。多分11月の選挙に向けてキャンペーンを期待して、あるいは最低でも一票を期待してのことであつたのかもしれませんが。2通の手紙の間に何があつたのか、私には見当もつきませんでした。誰かの気が変わるのを恐れ、何故なのか追求する気持ちは毛頭ありませんでした。

理由はなんであれ、1957年5月23日午前10時、私はカルフォルニア、フォートオードのアメリカ陸軍から正式に名誉ある除隊として、任務を解かれました。私は北カルフォルニアの芝に膝まづき、キスをしました。私は断ち切られたキャリアを再スタートさせるべく、ハリウッドを目指して戻りました。

私のモンタナの友人たちについて最後に一言。ある晩、野営（戦闘を想定して外で生活）しているときのこと、安いウィスキーを飲みながら炎をみつめている時、彼ら孤独な男たちがどのように凍えるモンタナの退屈な夜を過ごすのか、悲しくも優しい話を聞きました。そうです、その伝説は本当でした一羊飼

私たちは、本当に羊たちとセックスをするのです。実際のところ、私の兵隊仲間を信じるとすれば、彼らはそれぞれの羊に名前までつけ、その魅力などにつき評価を交換しているのです。

ジョー・E・ブラウンが「お熱いのがお好き」でジャック・レモンに最後のシーンで言ったように「誰も完璧ではない」のです。

軍隊の実務訓練から解放された後は、私の6年間の予備軍での責任を週末ごとにカルフォルニアのフォートマッカーサーで果たし、毎夏2週間をカルフォルニアのキャンプロバーツ(サンシメンのハースト城の近く)で過ごしました。そこで、私ははじめてヴィンス・バグリオシ、予備軍将校に会ったのです、のちに私は彼がロサンゼルス州検察官になるために支援しました。ヴィンスはのちに、チャールズ・マンソンをサンクエンティンへ送ったことで、世界中で有名になりました、マンソンの「ファミリー」がシャロン・テート、レノ・ラビアンカそしてその他多くの犠牲者を殺害した、1969年夏の殺人事件で、彼自身がいずれの現場に居なかったにも拘らず。

\*\*\*

私が戻って来て最初の土曜日に、自分自身のウェルカムホームパーティを開き、私のLACCの仲間全てをオーキッド・アベニューのペントハウスへ招きました。中でも私は、後に「アンディー・グリフィンショウ」と「メイベリー RED」で知られたケン・ベリーと結婚したジャッキー・ジョセフを招きました。ジャッキーは是非参加したいのだけれど、彼女はサンセット大通りにある橋の下のキャバレコンサートと呼ばれる劇場でミュージカルをやっているところだと言いました。そのミュージカルの名前は「ザ・ビリー・バーンズ・レビュー」で、ケン・ベリー、バート・コンヴィ、アン・ギルバート、そしてビリーの前妻であるジョイス・ジェイムソンが出演していました。

彼女は「あなたは、是非ショウを見に来るべきだわ」「きっとあなたは気に入るはずよ、そしてジョイスはあなたにぴったりよ。彼女はセクシーで、愉快だし、それに頭も良くて、博学だし、すごいマリリン・モンローをやるのよ。もし気に入ったら、土曜の夜のショウのあと二人であなたのパーティーへ行け

るわよ」と言いました。

それで、私はそのショーを見に行き、彼らもパーティーへ来てくれました。それが、独身の私とジョイス・ジェイムスンとの長い関係—それから続く12年間、出たり入ったりの関係の始まりでした。

ジョイス・ジェイムスンはドリー・パートンとリリィ・St・シアー、40年、50年代の伝説のストリップアーティストを混ぜたような感じでした。彼女の成り済まし芸のレパートリーはシャーリー・テンプルからマレーネ・デイトリッヒまで幅広いもので、ジュディ・ガーランド、エイミー・センプル・マクファーンソン、デビー・レイノルズ、そして二人のベティー、ベティー・ミドラーと、ベティー・デイヴィスが含まれていました。

そしてこういう女性たちを、まさに彼女が舞台でまねて演じていたのです。「スティーブ・アレンショー」で、彼女はチャーリー・マッカーシーにあるようなダミーと呼ぶキャラクターを作り出しました。彼女のダミーは「ホニー・ガール」でジョイスが、マリリン・モンロータイプ—典型的なハリウッドのブロンドで事故死をした—をまねたものでした。批評家たちはジョイスを彼女の時代でセックスアピールのある最も多芸なコメディエンヌと表しました。私も同感です。

私を知る限りでは、ジョイスは不眠症で鎮静剤としてミルタウンを使用していました。彼女は明け方直前までほとんど眠ることがなく、お昼ごろに起きていました。私の素人分析では、彼女はおだやかなうつ病ではなかったかと思いますが、いかなる医師の治療を受けようとはしませんでした、ただ一人、私が強く言うので、ちょっとだけ会ったシャーマンオークの精神科医を除いては、そして、その医者彼女をペテン師に違いなと思ったようです。

この全てをもってして、彼女は私が今まであった中でもっとも魅力的な女性でした。彼女は温かく、話し上手で、当時の流行の文学を良く知っていました。彼女は研ぎ澄まされたウィットをもち、ユーモアを理解し、彼女と一緒にいることを選んだ時には、一緒にいてとても楽しい人でした。残念ながら彼女が付き合う気持ちにならない時は、単に電話を切り、電気を消し、ドアに鍵をかけ、文字通りに、感情的に、なんであれその問題がすぎさるまで、そうしているのです。

私は彼女がロシーン・バーのような多重人格者、あるいはジョアンヌ・ウッドワードが、オスカーを得た「イブの三つの顔」で表現された人格であったとは、信じていません。しかし私が彼女を誘いに行った時に、誰がドアを開けるのか確信があったことは決してありませんでした。彼女のほとんどの人格は心地よく、刺激的で、一緒にいるのに楽しいものでした。彼女のプロとしての最大の欠陥は、観客に対していつも同じように、楽しく心地よい人格を提供することが出来ないことでした。これが彼女を、キャロル・バーネットのように、テレビで愛されるコメディのキャラクターとして、番組を持つようなキャリアに、本当は充分資格があるのに出来なかった決定的な欠陥だったのです。

ともかく、これが1957年に初めて会った時の、魅力的かつ矛盾した、そして素晴らしいジョイス・ジエイムスンです。私はタイラーにも会いました、彼女の前の夫ビリー・バーンズとの間に出来た息子です。タイラーは当時4歳で、今はウエストハリウッドと呼ばれているドニードライブからちょっと離れた、キースアベニューのジョイスの住む家の後ろに住んでいました。(タイラーは今50歳代で、ハワイに住み、薬剤師や老人たちのコンパニオンとして働いています。)

軍隊での基礎訓練を2度も経験したことにより、私の肉体的コンディションは素晴らしいものでしたので、私はその状態を保ちたいと思いました。それで、ドニー（ビバリーヒルズではなくて）近くのサンタ・モニカにある、ビバリー・ヒルズ・ヘルスクラブに加入しました。クラブの会員は3つのグループに分かれていました。一つはデニス・ホッパー、ニック・アダムスそして私などを含む若い俳優のグループ。2つ目のグループはもう少し年上の俳優のグループ、ポール・ニューマンやロック・ハドソン（エリザベス・テイラーと故ジェームス・ディーンと「ジャイアント」で共演し有名になった）のような俳優からなるグループ。サミー・デービス Jr. もときどき、拳銃の早抜き技を練習するのに立ち寄り、自分のホルスターとピストルを持って、通りに面したロッカールームをブラブラしていました。

残りのクラブ会員はその地域に住む仕事から引退したユダヤ人のビジネスマンたちで出来ていました。彼らは一度もウェイトトレーニングルームには行くこと無く、むしろ沢山の電話が近くにある外で、日光浴ができる方を選

んでいました。電話は東海岸の株式市場の時に、何か大きなことが起きた場合に、すぐに株式仲買人にコンタクトがとれるようにするためです。時にはサウナにやってくることもありました。彼らのほとんどは映画産業について全く知らないか、関心がありませんでした、そして、彼らと2つのグループの俳優たちとの間に炸裂する文化は、時として奇妙な瞬間へと導きました。

私が気に入っているエピソードは、クラブの年配のメンバー二人の話です—そうですね、エイブとルーイとしましょう。ある日彼らがサウナにいるときに、ロック・ハドソンが入って来ました。チラッと見上げて、エイブが言いました「あの良いからだをした青年を見ろよ。あいつは良いバスケットボール選手になるよ」(ロックは本当に193センチはありました。)

ルーイが「シーッ、あいつはロック・ハドソンだよ！」と応えると。

彼のタオルを直しながら、エイブが「ロック？そりゃあバスケットボール選手にぴったりの名前だ」と言ったとか。

エド・フェルドマンが、私がクラブに入った最初の週に教えてくれた話です。エドの仕事が到着する会員に「やあ、元気そうだね」と声をかける以外に、どんな仕事をしていたか知りません。彼は人の名前を覚えることはなかったようです、しかし、いつも煙草を手にもち黄ばんだ歯を見せて笑っていました。私がしばらくクラブに行かない日が続いたある日エドが、クラブの会員に挨拶しながら煙草を拾おうとしている時に、サウナ室で突然亡くなったと聞きました。

50年代はもう半分以上過ぎ去っていました。戦後は急速になにか新しいものに向かっていました、若者の心、60年代に爆発するであろう革新的なことに向かってです。1957年の夏、アイクはペンシルベニア通り1600番で2期目を迎えていました。ジョセフ・マッカーシー上院議員、真の愛国主義者、好戦家、多くの物議をかもしだし、そして気違い、で、過去4年間において政界を怯えさせていた男が突然、48歳で亡くなりました。多分大酒のみがたたったことでしょう。ソビエトでは、フルシチョフ首相が彼を交代させようとする陰謀をくじきました。若さあふれる上院議員ジョン・F・ケネディは、上院で政権に、フランスのアルジェリアにおける植民地的支配を支援するのを、やめるよう要請する演説を行いました。そしてショウビジネスの世界では、今



やハリウッドの魅力的な映画スタジオとして維持してきた輝きが色あせ始めていたMGMが、フレッド・アステアとシド・チャリース主演のミュージカル「絹の靴下」をヒットさせていました。

そして私は、陸軍に召集された時に置き去ってしまった、芽生えかけていたキャリアの芽を生き返らせようと、気が狂ったように働いていました。1957年の残りの7ヶ月、色々と出たTV作品の中では取り分け、ジャック・ウェブが制作、主演の「ドラグネット」があります。それは他のTV番組同様一回だけの出演でしたが、ここでの出会いが数年後の出来ごとに繋がるので覚えているのです。

当時、ウェブは、ワーナーブラザーズでTV制作をしていました。彼は私に個人的に連絡をしてきて、私の除隊後のTV作品をスラスラとあげました(もちろん、あのウェブが、私の略歴をそんなに詳しく調べたのを知り、とても驚きました)。彼は、若い保守派の弁護士と、自由で現代的な彼の母親をテーマにした一時間ドラマの計画があるというのです。その母親役には、ベティ・デービスと契約していて、息子役を誰がやるかについては彼女が「うん」と言わなければならない、彼女は私の出演作を見ていて、彼女のベルエアーの自宅で翌日の午後1時に私に会いたい、と言っているとのことでした。(独断的かつ突然ではありますが、それが映画スターのやり方です。)

私は翌日時間通りに到着しました(その時間から考えて)彼女の家か、近くのベルエアーホテル(素晴らしい食事と定評のある)で昼食を取りながらになるだろうと推測していました。しかし、そうはなりませんでした。

私が部屋に入って行った時、彼女は立ちあがろうとせず、ただ手を伸ばしてきました。多分私はその手にキスをするか、握手をするのだろうと思い、握手をするを選びました。そして、私が椅子に腰かける前に、彼女は私たちの間にあるテーブルの上のカティーサークの瓶を指さし、あの有名なかすれ気味の声で言ったのです「ご自由にどうぞボブ」。奇妙なことに、当時私は確かに、カティーサークを飲んではいたのですが、午後1時から飲むことは、決してありませんでしたので、丁重にお断りをしました。私たちはショービジネスや政治のことについておしゃべりをし、私はお腹がすいてきたので、しかたなくスコッチのとなりに置いてある山盛りのピーナッツを食べ始めました。

午後2時近くになり、私は誰か家の人が、ナッツ以外のものを食べれる部屋に案内してくれる気配がないかどうか、とても気になり出しました。しかし、そんな幸運はなく、他に選択肢もないので、カティーサークでベティに付き合うことに決めました。グラスは一回、二回と満たされ、ベティに追い付くには相当遠い道のりでしたが、私のベストを尽くしました。

3時ころになり、もう一杯のカティーサークのロックのあと、ベティは彼女の人生について私に話しました。彼女は、まだワーナーブラザーズのプロジェクトについて、なにも触れていませんでした。でもスコッチのお陰で、私はそんなことはもうどうでも良くなっていました。

4時ごろ、彼女の人生の話が終わり、ベティはベルエアーから何マイルも離れたアンバサダーホテルでの彼女のお嬢さんの何かのために、フォーマルドレスに着替えなくてはならないと宣言しました。私が立ち上がると、「私が着替えたら、ホテルまで私を載せて行っていただけるかしら？」と言うのです。

私は、「デービスさん、私はあなたをホテルに送っていけるどころか、あなたをちゃんとみることもできません。」と答えました。

どういう訳か、彼女は私の言ったことが、典型的なノエル・カワードのウィットと思ったようで、彼女は心から笑い、私が彼女の多くの映画で観たように優雅に手をふりました。「おや、心配しないで、それじゃあ私が運転するから、あなたが私と一緒に来て、カナッペとお酒を飲みましょう。そしてチェイスンへ行き、夕食を取りながらジャックのちょっとした企画についてお話ししましょう。」

これはもうちょっと、遅すぎでした。「デービスさん、大変申し訳ないのですが、私は今とても気分が悪いので、また日を改めていただけませんか？」私はその場を失礼して歩いて、いや、フラフラしながらベルエアーホテルに行き、私の車を残し、タクシーを呼んで、私のハリウッドの静かな住みかに戻りました。後で、私の車が暗くなる前に警察に牽引されたことを知りました。

ウェブの企画は実現しませんでした。ベティ・デービスと私がその後互いに会うこともありませんでした。ただ、彼女の夫たちの一人、ゲイリー・メルルには60年代に会いました。彼もまたお酒に関しては大変でした。その話はまた後ほど。

この除隊後の期間、私はデニス・ウィーバー、ステージソサエティからの友人、と「ガンズモーク」に2回出演しました。私が招集される前にデニスは「デザイナー・アンダー・ザ・エルムトリー」の私を見に来てくれて、その後一緒にお酒を飲み、その劇中ずっと通して「集中していた」という50年代の言い方で褒めてくれました。50年代の前半に、デニスが車で生活しているという噂がありました。「ガンズモーク」と「警部マクロード」で大スターになり、2006年に彼が亡くなった時には、彼は億万長者をはるかに数倍も超えていました。

他のウェスタン出演も続きました：ディック・パウエルの「ゼイン・グレイ劇場」の「ア・ガン・イズ・フォー・キリング」と「カレッジ・イズ・ア・ガン」；フロンティアーズ「リターンオブジュバル・ドラム」；フロンティアドクター「トゥィステドロード」；「リバーボート」ダレン・マクギャビンと若きバート・レイノルズ主演；そしてディズニーの「怪傑ゾロ」、これで私はメキシコ人の雨乞い人を、変な口髭とひどいアクセントで演じました。（この役はナタリーとRJの「オールザファインヤングカニバルズ」という、観るに堪えない映画から私を遠ざけました。ジョージ・ハミルトンが私のやる役を演じました—KHJ-TVのジョージ・ハミルトンとは違います。それは見せかけのテネシー・ウィリアムズスタイルの退廃的な南部の舞台にした明らかに営利目的の急ごしらえの粗悪な作品でした。ナタリーは後に「私たちは皆南部なまりで、かつらをつけて歩きまわり、ともかく出来るだけ、ひどく退廃的にみえるようにしたの」と語っていました。今日この映画はもし、80年代に英国のポップグループがその映画のタイトルを名前にしなければ、忘れ去られているでしょう。）

1959年に他のウェスタンは、「ロー・オブ・ザ・プレインズマン」、私は西部に出かけた若き日のテディ・ルーズベルトを演じ、そして、ロバート・ホートンとワード・ボンド主演の「ワゴントレイン」に出演しました。ワードは、あの有名な酒豪監督、ジョン・フォードの作品に出るジョン・ウェインたち「タフガイグループ」の一人でした。ボンドはお酒についていえば、他のタフガイにたしかに引けを取らないこと、間違いありませんでした。

私は「ワゴントレイン」に2回出て、ワードと彼のお酒の飲み方をかなり良

く知るようになりました。彼の一日は、夜明けのメイクアップルームではじまり、目を覚ますためにカフェロイヤル、コーヒーとウィスキーを混ぜたものを飲み、それに続いてセットでは、通常ブラッディメアリーかスクリュードライバーを飲んでいました。彼はそれを、「毎日のビタミン」と称していました。お昼には、私も時々一緒でしたが、彼は素晴らしく話し上手でした、そして大体いつも赤と白の両方のワインを飲みました。 昼食後のために常に冷えたビール6缶を用意していました。

そして、午後5時になるころ、ボンドはこう言うのです、「おい、日が沈んでいくよ、本当に飲む時間だな。」—それはボンドにとってはもっと強いお酒を意味していました。私が覚えているのは、ライウィスキーとか安いバーボンウィスキー、あるいは両方ともであったと思います。

これが彼が昼間に飲んでいたので、夜にどうなるのか想像もつきませんでした。

ワードの名誉のために言いますが、彼は、いつもセリフは完璧でしたし、いつも何が行われているか正確に把握していました。しかし、もっと重要なことは、彼は「ワゴントレイン」の聡明なワゴンマスターとして、とても素晴らしく温かく、信頼のできる人でした。私は彼と一緒に仕事をするのが本当に楽しかったので、彼が1960年（57歳）、自宅の浴室で心臓発作で突然亡くなった時は、とても残念に思いました。私はその後、彼ほどの強力な個性をもったTV俳優と仕事をしたことは一度もありません。

私はこの時期に、「絞首台の決闘」というウェスタン映画を一本、フレッド・マクマレイとやっています。いつものように悪事を働いて、絞首刑にされそうになる若い嫌な奴を演じました。フレッドは儉約家でした。彼は昼食に、必ず家からサンドイッチを紙袋に入れて持ってきていました。彼はウィルシャー大通りのほとんどを所有しているという噂があったくらいですから、それは本当に必要ないことでした。

ある日、彼は私の編み上げ靴をどこで、いくらで手に入れたのかと尋ねました。私はいくらだったかはわからないが、ハリウッド大通りのメイファー・ライディングで買ったことを言いました。

翌日、フレッドは古いくたくたの編み上げ靴を持って来ました。「家の地

下室で見つけたんだよ。結構節約したと思うよ」と私に言いました。彼は素晴らしい悪役であり、才能あるコメディ俳優であり、そしてとても抜け目のないビジネスマンでもありました。

これらのTVと映画の仕事は皆とても楽しく、まあまあ収入があり、そして私の知名度と才能をハリウッド社会で認知してもらい、広げるのには役立ちました。しかし、私の人生のこの時期のもっとも重要な仕事が、私が今まで拘わった仕事のなかで最も安っぽい映画になってしまうであろうとは予想もしませんでした。

実際、私の映画・TVにおける50年間についてインタビューを受けるとき、「荒野の7人」「ブリット」「タワリングインフェルノ」そしてとくに「ナポレオン・ソロ」について聞かれたあと、必ずインタビュワーはちょっと伏し目がちに、気が進まなそうに尋ねるのです。「一体どのようにあの“ティーンエイジ・ケイブマン”にかかわることになったのですか？」と。そして、これがどうしてそうなったか、です。

1958年の夏、私は恋人のジョイス・ジェイムソンが、キースアベニューの小さなアパートから西ハリウッドのクラークストリートの新しい寝室が2つあるアパートに引っ越すのを、手伝っていました。キースアベニューでは、ジョイスは彼女と前夫のビリー・バーンズとの間にできた息子タイラーを、同じ敷地内に住む年配の夫婦に預けていました。それで、彼女の当時の主な収入である「ビリーバーン・レビュー」に夕方と週末に、出演することが出来ていたのです。

ある午後、私はクラークストリートのジョイスの新しい家に、ちょっとペンキを塗るのに立ち寄りしました。その途中で、代理人からある台本を受け取りました。彼は「凄く面白い話だし、政治的にも君にアピールするものがあると思う」というのです。台本の表紙には「プリヒストリック・ワールド」（原始の世界）と書かれていました。それは、なんだか妙な空白がたくさんあり、読んでもさっぱりわからず、ようやく最後になってはっきりとしました。私の役は、核戦争で地球上の生命が絶滅したあとの、小さな人類の部落の「シンボルメーカーの息子」でした。言いかえると、台本にある人々はとは、アルマゲドン後の新しい世界の始まりを代表しているのです。（この話は見え透いてい

てなんの新鮮味もないことは分かっていたし、実際そうだったんですが、今日の映画ほどではないと思います)

監督はロジャー・コーマンでした。私たちには、いくつかのかすかですが、個人的な繋がりがありました。彼は私の「エンド・アズ・ア・マン」を観てくれていました。そして、のちに私の母の、アイルランド系親類の、従妹ジリー・ハロランと結婚するのです。彼は、そしてのちに国際的に有名な俳優や監督を（ジャック・ニコルソン、フランシス・コッポラなど）育てた人になります。一番大事なことは、彼は低予算映画のプロデューサーとして手腕を発揮し、富みを築いたということです。この「プリヒストリック・ワールド」が、最終的に「ティーンエイジ・ケープマン」というタイトル名に変わって公開されてからは、彼はめったに自分では監督をしませんでした。そして彼の奥さんのジュリーが、彼女自身でプロデューサーとして成功するのです。

その映画の奇妙な脚本の作家は、実際のところ興味深い履歴の持ち主でした。彼は前年にジェームズ・キャグニーが、ロン・チャニーを演じた「千の顔を持つ男」で、オスカー脚本賞にノミネートされていました。彼の名はR・ライト・キャンベル、当時ジュディー・キャンベル（のちにJFKの彼女たちの一人として有名になる）と結婚していたビル・キャンベルのお兄さんでした。そして、そのボブ・キャンベル（そう呼ばれていた）は、私がジョイスに会う1957年の夏以前に、彼女と付き合っていたのです。ハリウッドは狭い世界です。

私がその時{プリヒストリック・ワールド}と呼ばれていた脚本のことをジョイスに言うと、彼女は、彼は映画の仕事だけでなく、才能ある小説家で詩人でもあると言いました。ジョイスは脚本を観ることもなく、ボビー・キャンベルは人気があるから（脚本家として）、やるべきだと言いました。そして、さらにジャック・ニコルソン、私がプレーヤーズ・リングで教えていた1956年から知っているのですが、その彼も映画に出演するという噂もありました。しかしながら、その時は私にとっては何の意味もありませんでした、彼が有名になるのはそれから10年も先のことでしたから。

ともかく、50年前を振り返ってみるに、多分25歳の私は、自分なりに核兵器絶滅運動になんらかの形で、この映画が貢献できるかも知れないと、言い聞

かせたのだと思います。少なくとも私はそう思っていますし、ずっとそうこだわっています。

要するに、私は「プリヒストリック・ワールド」のキャストに加わりました。

この映画は10日間の撮影で、90分の作品の予定でした。撮影は、地球上に残された場所として、ロサンゼルスグリフィンパークで行われました。その映画全キャストの衣装代は、100ドルくらいで納めなければならなかったに違いありません。私たちは皆、1958年という時代に隠すべきところを覆うため、ドロシー・ラムーアが着ていたようなサロンを着せられました。

ビーチ・ディッカーソン、私の友人でローレルキャニオンに家を購入するために家具の運搬（生活のためではありませんでした）をしていた彼も、ロジャーのために俳優として働いていました。この映画では、彼は熊と底なし沼にとらわれた少年を演じ、映画のための音響を手伝っていました。この10日間の撮影で、私は2回入院、そして一回は、本来は私が倒れる時に移動しているはずの木にぶつかって、卒倒することとなりました。

そして映画の中で私はさらに（映画歴史家のためにいうのですが）、グリフィンパークの森の中で鹿を追い詰め、その角のある動物を捕まえる手段がなにも無いと気付いた後に、弓と矢を發明するのです。映画では、私が公園のそこそこ茂った森の中を歩いている私が、木の枝にぶつかるところが観られます。私はそれを折り、一瞬考えるのです。そして、不思議なことに腰巻のどこからか糸を取り出し、その折れた枝の両端に結びつけるのです。そしてまた考え、とがった棒をその糸に差し込んでみるのです。ビンゴ！そう私は弓と矢を發明しました。

信じないなら、まずは映画を観てください。

次の撮影は、私が、両肩に明らかに詰め物が入っているこわばった小さな鹿を載せて運んでいるシーンでした。明らかに死後硬直が始まってました。こうして大爆発のあと、シンボルメーカーの息子が、動物が血を流す競技を再発見したのです。

グリフィンパークの近くに、サンタアニカ競技場があり、そこには大きな丸太がかかっている小川がありました。私のあるシーンでの仕事は、丸太を渡し出し、流れに飛び込むことでした。私はロジャーに、私の足を傷つけるよう

な物がないかどうか、誰かテストをしたかどうか尋ねました。彼はビーチ・ディカーソンがテストをして、水の中には危険と思われる物はなかったと言いました。ビーチ、覚えておいてください、彼は少年、熊、そしてときどき音響もやりましたが、水中配管工じゃないんです。

さあ、私とその丸太から飛び込むと、水は氷のように冷たかったのですが、それ以外はなにも悪いところがあったとは思えませんでした。ロジャーはもう一回撮ることに決め、それ自体珍しいことでした。私はまた丸太にのぼり、「アクション！」で端に向かって再び歩き出しました。ところが突然滑り出し、バランスを崩し始めました。足元を観るとなんと、丸太は私の血で染まり、私は再び小川に落ちました。そこはまさに前に落ちたのと同じ場所で、ガラスと金属の破片だらけだったのです。

私はすぐに近くの救急病院にかつぎこまれ、急いで傷口が縫い合わされました。当然その日の残りは、仕事ができませんでした。翌日は肌色の包帯で縫合された足をしっかりと巻いて仕事に復帰しました。

金曜日は、撮影1週目の最後の日でした。私のシーンはキャンプファイヤーの近くで（言っておきますが、私は火は発明していません）。私を襲ってくる獰猛な犬を受け流すところでした。

私は監督に、この犬は映画用に訓練された犬なのかどうかを聞きました。彼は私を犬のトレーナー（半分酔っばらっているように見えたが）に紹介しました。彼は何年も一緒に、この大きな犬と仕事しているが、問題は何も無いと請け負いました。

そして、再び「アクション！」の声がかかり、私が振り向くと、（多分動物が私に近づきながら吠えているのが聞こえたからだと思いますが）、私の顔に向かって勢いよく飛びかかって来たのです。

ギリギリの瞬間、とっさに私は左手を上げ、そのモンスターのような犬は私の前腕に噛みつき、おなかをすかしたトラのように噛み続けたのです。トレーナーが慌てて飛んできて、私からその野獣を引き離しました。私は血まみれで、看護婦（俳優組合から撮影に常駐するように依頼されている）も飛んできて、



その場で止血処置をしてくれました。そして再び、私は近くの外科へ送られました。それが私の1週目でした。

2週目は私の腕のガーゼと包帯は取りました。足はまだ肌色の包帯をしたままでした。そして、最後の5日間は、なんとか怪我なく撮影を終えることができました。もっともその理由は、私が少しでも怪我をする危険性があることを断ったからです。私のスタントマンが用意され、私の代りをやり、私は彼の仕事は、全く見ませんでした。その時までには、私は世界平和の名の下に十分な仕事をしたと、感じていました。

この主役を演じたことによるちょっとした収入で、私は1955年式黒のキャデラックを買いました、初めての新車に近い車です。(本当に新車を買ったのは1961年11月22日、私の誕生日プレゼントとして自分で1962年式ブラックチェリーリンカンコンティネンタルを買いました。当時としては7000ドルという最高級のアメリカー車で今でも保有して運転しています)

「ティーンエイジ・ケイブマン」は私の腰巻を着た最後の作品でもあります。この映画がついにハリウッド大通りのハワイ劇場で上映された時は、マイケル・ランドンの「ティーンエイジ・ウルフマン」との2本立てでした。そう、のちにあの「ボナンザ」や「草原の小さな家」で大スターになる彼です。

役者は芸術一車一ために血までも流すのかとは、言うなかれ。

でも実際のところ不平も言うてはいられないのです。2008年のドルの価値にしてみると、25万ドル相当の収入を1958年に得たのです、私の初めての、何ものにも妨げられない、このビジネスでの完全なる1年でした。少しずつですが、私は自分の履歴書、実績、評価を作り上げていました—この「ティーンエイジ・ケイブマン」と他のもの全てです。

私の初めての海外ロケをした映画は、「ザ・ビッグショウ」でした。それは20世紀フォックスの、支配的な父親と反抗的な息子たちを描いたもののリメイクでした。最初のもは、エドワード・G・ロビンソンを主演にした初期のギャング映画で、2回目はスペンサー・トレシー主演のウエスタンでした。そしてこの3回目は、私の友人でもあるニッキー・パーソフを父親役にし、クリフ・ロバートソン、デヴィッド・ネルソン(ハリエット、オジー・ネルソン

の息子でリッキー・ネルソンの弟)、そして私が、その難しい息子たちでした。撮影はドイツで行われました。

ハリウッドの妙な考え方で、その映画はひとりに対し7万ドルの予算があったにも関わらず、まだスターがいませんでした。フォックスは、ローロデックス(訳者注:回転式名刺管理機)を回しながら、週1万ドルのサラリーを支払うに値するスターを探しました。

この条件にあったラッキーなスターは皆が大好きな水中ミュージカルのスター、エスター・ウィリアムズでした。しかし、脚本には彼女のための役がなかったので、ただ単にクリフのガールフレンドと書かれました。この決定はクリフ、エスター、そして私にミュンヘンのレストランで大いに食べて飲んで、お互いに良く知り合う機会を与えてくれました。

私はルフトハンザ航空で、ミュンヘンに行きました。私は機内でウィリアム・L・シャイラーの新書「第三帝国の興亡」を読んでいた。初めて、お洒落なベルベットの衿のブルックスブラザーズの黒のコートを着て、ホンブルグ帽をかぶり、飛行機から階段を降り(当時は接続する通路がありませんでした)、フォックスの制作チームに迎えられました。ターミナルに入るや否や、彼らはその本を手にもっていないで、どこかに入れてしまった方がいいだろうと言いました。その理由はブックカバーに卍があったからです。私はすぐに従いました。

それから私は、他の役者仲間がすでに滞在しているパークホテルへ案内されました。私はスイートルームに入った時、部屋の小さな冷蔵庫がビール、スナック、キャンディやその他の物でいっぱいになっているのを見て、とても喜びました。当然映画会社が配慮して用意してくれたものだと考えて、荷物をほどいたらすぐに、そのバーを試してみました、もちろんその中身はフォックスからのプレゼントだと信じていました。私は若く(26歳)、間抜け、そして間違っていたのです、結局すべて自分で払うはめになりました。それが、私が今ミニバーと呼ばれているものとの初めての出会いでした。

ドイツが第二次世界大戦に破れてから、10年とちょっとしか経っていませんでした、そしてダッハウ、最初の強制収容所はミュンヘンのすぐはずれにありました。クリフ、エスターと私は撮影が始まる前にそこを訪ねました。そ

のときはまだ連合軍がはじめて収容所に侵攻したときとほぼ同じようなままでした：火葬場、殺人ガスパイプのつながったシャワー室、被収容者を射殺隊が殺害したときに流れた血のための溝。そこは後に聖地となったのですが、そのときはまだなっていませんでした—そこやヨーロッパ中の収容所で起きたことを、そして人間が同じ仲間に対していかに残忍性を帯びてしまうのか恐ろしい教訓として忘れないために。その印象はそこを訪れたのち何年もの間、私の中に残り続けました。

映画のロケにおいては、一日中一緒に仕事をし、その仕事を終えたあと一緒に食事をするを通して強い友情が育まれます。我らがスター、ウィットにとみ、陽気なエスターは肉体的に最高のコンディションで、ボルガの船乗りを飲み潰すほど飲めて、それを彼女の共演者たち、クリフと私、にもやったのです。クリフは、大抵は先にいなくなり、私はそこに残りました、なんとか辛うじてです。

ある夜、すごく雪が降り、クリスが疲れたと言って先にいなくなった時のことです。私はエスターに、近くにナチス時代にヒトラーが多くの演説を行ったスタジアムがあると聞いたことを言いました。エスターは「確かめに行きましょう！」と言い。私たちはタクシーを呼びとめ、行きたい場所を説明しました。運転手はそこがどこだか正確にわかるし、そこがまだ実際にスポーツイベントに使われていると言いました。煌々と輝く満月に照らされたその大きな屋外競技場にはなんの問題もなく入ることができました。雪はさらに一段と激しく降っていました。

二人でその巨大なスタジアムが、総統に敬礼をしている何千ものドイツ人で埋め尽くされている様子を想像しようとしたひと時のあと、私たちは特に理由も無く、滑りやすくなっているコンクリートの座席を駆け上がったたり、降りたりし始めました、笑いながら楽しそうに。私は安全のためにエスターの手を握っていました。(エスターの方が、私が彼女に対してよりも、私の助けになっていたとは思いますが)。

彼女は当時、のちに結婚をするフェルナンド・ラマスと付き合っていました。ですからミネアポリス出身の若造と、世界の水中の女神との間に恋の戯れが入る余地はありませんでした。しかしながら、私の酒に浸されたリビドーには、

一度以上はそういう考えがよぎりました。いやいや、昔のノースハイスクールの奴らも、映画俳優を仕事に選んでいたらと思ったに違いありません。

最後に、多言語を話せる、エルケ・ソマータイプのスクリプトガールのイングリッド、が撮影の後に私について、ローマ、ナポリ、カプリ、パリ、ロンドンの素晴らしい旅をしました。ロケで撮影することの、素敵な入門編でした。そのときも、今もロケは好きです—後で触れるいくつかの例外を除いて。

ヨーロッパで休暇を過ごした後、私は、普段の体重の165ポンドよりも約10ポンド増えて帰ってきました。イタリア、フランス、ドイツにいる間、普段の食習慣（朝食なし、午後にグリルドチーズサンドイッチ、そして午後8時ころの制限のない食事）に反して、一日に2、3食ご馳走を食べていたのが、主な原因でした。

この問題は普段の生活にもどること、さらにビバリーヒルズ・ヘルスクラブのジムに2倍通うことで簡単に解決しました。早春にはフォートオードから1957年に帰って来てからの中で一番良いコンディションに戻りました。

そうしてこの頃には、私はこの主要な人気テレビ番組のゲスト出演者、決してAクラスとは言えない映画の共演者のすべてからどう抜け出すかに、集中していました。私が目指していたイメージは私の中では、とてもはっきりとしたものでした。ここにしっかりと心に封入されてエピソードがあります。メイニー・ドワーク、私の代理人が行けとといった洋服屋ですが、かれはジムのほぼ真向かいに店を開いていました。ある日メイニーの店を出たとき、とても尊敬される写真家のジョン・イングステッドが停めた車のところを通りました、そこは私が軍隊に入る前の56年の秋、トニー・カーチスが彼の新しいシルバーのロールスロイス（室内が格好いい赤の革の）コンバーティブルを停めていた所でした。あのとき私は自分に言い聞かせたのです「いつか、いつの日か」と。

私がうすいピンクのロールスロイス1974年式シルバーシャドーを初めて買ったのはその10年も後のことでした—しかしともかく、いつかは、叶ったのです。

目標達成に向けたもうひとつの大きなステップが1959年の春にありました。

私の代理人シッド・ゴールド（ジャック・フィールドのボス）がジムにいる

私に電話をしてくれました。「ワーナー・ブラザーズへすぐに行って」「ホイット・ボウワーが待っているから、君にぴったりと思える役とその台本を用意してらって」と。

その映画は「ザ・ヤング・フィラデルフィアン」（都会のジャングル）と呼ばれることになります。そしてそれは、Aクラス映画で、私がまさに待ち望んでいたものでした。それについては二つの事実が確定していました。まず、ヘルスクラブの友人、33歳の売り出し中のスター、ポール・ニューマンが主役を演じること。次にその映画はビンセント・シャーマン、ベティ・デイビスのようなスターたちの映画を作っていた、ワーナー・ブラザーズの有名な監督の一人で、50年代はじめには一時的にブラックリストに載せられていた人が監督する、ということでした。

しかし、そこには一つだけ問題がありました。私の2年間の映画・テレビの経験において、初めてスクリーンテストを受けるように言われたのです。私は会社が選んだシーンのセリフを、カメラの横か後の暗闇でスクリプトガールがやる別の登場人物と一緒に演じなければならなかったのです。テストは翌週に予定されていました。

翌朝私がジムに行くと、ポールがそこで左手の早抜き練習をしていました（彼は右利きなのでかなりの挑戦でした）。

ポールが「おい、あのワーナーの映画、“ザ・ヤング・フィラデルフィアン”だけどさ、僕のMCAの代理人が、僕を会社との契約をはずすためにやらなきゃならない仕事なんだ。」と私に言いました。

ポールは、彼を変な衣装の「銀の盃」という映画に出させ、さらにブランドーに似せて紙を黒く染めさせるという侮辱に、ジャック・ワーナーを決して許していなかったのです。彼は激怒して、ディリーバラエティーというハリウッドで1番の新聞に、映画界から身を引くと広告を出したくらいでした。

ともかく、ポールは「ザ・ヤング・フィラデルフィアン」はポットボーラー（訳者注：安易な金儲け目当てのもの）で、メロドラマのたぐいだと言いました。でも私のチャット・グウィン、基本アルコール中毒者で、朝鮮戦争で片腕を失い、殺人の罪を間違っさせられるという、その映画ではこれ以上ない良い役だと言うのです。これは、まだ脚本を全部読んでいない私には、初耳で

した。

ポールの言ったことは私をすごく興奮させました、でもスクリーンテストをしなければならないことを、私はまだ心配していました。私はこのジレンマを説明しました、するとポールは「心配するなよ、僕が君と一緒にテストを受けてあげるよ。カメラからははずれてだけどね。」と言ってくれたのです。

私たちは、ポールが演じる人物が、殺人者として捕らえられてから牢屋にいる私に会いにくるテストのカギとなるシーンについて話し合いました。ポールの役は、フィラデルフィアの法律事務所に勤めているが、刑事事件を扱った経験のない弁護士の役でした。もちろん、彼はチェットの依頼を受け、他の人物が犯人であることを証明するのです。

私は、テストの日、早めにスタジオに行きました。ポールはもうそこにおいて、大切なテストについてさらに話しあうことが出来ました。

彼の言葉通り、ポールは、カメラの外で私と一緒にテストをしてくれました、嵐のように演じ、まるで彼のテストかのように魂と情熱をこめて演じてくれました。その翌日、私は役を得たことを聞かされました。

これが私にとって、とても大きなチャンスであることは明白でした。一台無しにすることなどとうていできないくらいの。そういう気持ちで私はその仕事に取り組みました。私はその役を練習するのに、一日をどや街で過ごしました(私のプレスエージェントが提案し、ファン雑誌特集用に、写真家にその様子を取らせました)無一文のアル中たちと話し、彼らのジェスチャーや行動を観察し、彼らの人格の中に入り込めるように努力しました。私はさらに、自分の最善の仕事が出来る本当の機会を作り出すために、ポールとも、留置場での私の山場シーン撮影前夜に練習をしました。

全ては私にとって良い方向に進みました。その映画は1959年に公開され、私はオスカーのベスト助演男優賞にノミネートされました。

良い演技は、このサクセスストーリーのほんの一部です。私のノミネーションは、ジェリー・パムの提案によるキャンペーン活動によるところもあるのです。今では常識となったキャンペーンですが、これはそういう初めてのキャンペーンのうちの一つでした。「ハリウッド レポーター」の全面掲載でたった750ドルだったのを覚えています。

50年代後半におけるハリウッドの伝統的な宣伝活動は、まだ典型的なものでした。若い俳優たちは、通常広報担当が手配したハリウッドでのイベントで、公衆に見られるべきとされていました。私もその期待にそって行動しました。この期間はジェリーが私の「お相手」を紹介してくれました—写真写りの良い売出し中の若手女優たち、前ミスアメリカのアン・モブレイ、コニー・スティーブンス、そしてフェイ・スペイン、皆、私同様自分たちの名前と顔にスポットライトを当てるとともに熱心でした。

このように設定されたお相手の一人が私がノミネートされた1960年のアカデミー賞に連れて行った、ステラ・スティーブンスでした。私は母も連れていきました、そのときはまだ知りませんでしたが、母はあと1年の命でした。

どういふわけか、私はオスカーの式典に着ていくべきものを間違えて伝えられたようで、私はハリウッド大通のパンティージ劇場に、燕尾服と白のタイで到着しました。他に燕尾服を着ていたこの世界の人は、ほかならぬその夜のホストのボブ・ホープだけでした。

この広報のために作られたデートに混じって、本当のデートも結構ありました。このころ私は、TVや映画でだんだんと有名になっていく恩恵に気づき始めました。この時代はアメリカの18歳から20歳の魅力的な曲線美の女の子たち皆が、スターになるためにハリウッドにやってきたといっても良いくらいでした。99%は夢破れお母さんや事務員になるのに、故郷に戻りました。しかし、毎年新しい一団がロサンゼルス町の並みに現れ、私のようなそこそこ成功した若者は、贅沢なこのチャンスを十分に活用しました。

おそらく「甘い罠」という古い劇、映画を覚えおられるでしょう—私の心のなかでいつも特別な存在になるものです。1970年、私はシカゴでこの劇に携わり、今の妻リンダと出会います。) 映画ではフランク・シナトラ演じるチャーリー・リーダーという名の独身の男が、デヴィッド・ウェイン演じる結婚している友人から尋ねられるのです、「ニューヨークというこの街にお金持ちで、責任のない独身でいるということはどういうものなの？」

チャーリーは答えます。「死んで天国に行ってしまったようなものさ」

50年代後半、60年代前半のハリウッドは本当に天国でした。実際のところ、誰かが言いました(多分ジョージ・バーンズ、有名なコメディアン、だっ

たかかもしれない)「ハリウッドはお金の稼げる高校だ」と。全く同感です。私の役が大きくなるにつれて、収入も増えいき、私は、最も可愛いチアリーダーを自由に選べるという、キャンパスの有名人のうちの一人になっていくのがわかりました。

\*\*\*

しかし、私がスターとしての増大する人気の成果を楽しんでいた時、母は死に向かって急に下り坂を辿り始めました。そして具合がどんどん悪くなって行くにも関わらず、母は私の仕事をとても良く理解し、出来る限り参加してくれました。

ここにちょっと甘く切ない思い出話があります。1961年の晩春、私は「アスファルトジャングル」というエミー賞受賞者ジャック・ワーデン主演のTV番組に出ました。私はウォレン・W.スコットというアメリカにおけるナチのような政党の党首を演じました。その役は、アメリカナチ党の本当の党首ジョージ・リンカンに、かなり良く似せたものでした。

母は私の役が賛辞する観衆で埋め尽くされた公会堂で、ヒトラースタイルの演説をするシーンを撮影するセットを訪れました。母はめったに私の出演する番組を訪れることはなかったのですが、高度なメロドラマ的演技を楽しむだろうと思ったのです。

母の反応は私を驚かせました。「ロバート、あなたは私を怯えさせるわ。本当に怖いわ！」

その言葉は、私が母と共演した昔の経験を思い出させました。1954年、私たちは、クリストファー・イシャーウッドによる「アイアムアカメラ」を舞台で演じました。(後にミュージカル”キャバレー”となったのと同じ話です。)母はドイツ人の家政婦を演じ、そして私はイシャーウッドに基づいた、1930年代のベルリンのゲイのイギリス人作家を演じました。

最後の衣装リハーサルで、私が私の最大の力で怒鳴ると、母は固まってしまいました。そのシーンは完全に中断しました。「お母さんどうしたの？」

「セリフを思い出せないのよ。」母が私に言いました。母の下唇は少し震え



ていました。

「なんだって？」監督が入ってきました。「君は一度もセリフを忘れたことがないのに、どうしたんだい？」

母は私を指さし、こう言いました。「それがまさにあなたのお父さんが、私に怒ったときの表情なのよ」

7年経った今でも、私の演技は明らかに母を怯えさせてしまったのです。

ジャック・ウォーデンが私の大演説のあとにやって来て言いました。「無茶苦茶怯えさせられたよ、君」そして、私の母の健康状態のことを知らない彼は、母を魅力的と思ってくれて、「収録が終わったら、ウォレン（私を役の名前で呼んでいました）、君と君のお母さんをビバリーヒルズのスイスカフェに夕食に連れて行ってあげるよ。」と言いました。

私は、母が喜ぶだろうと知っていたので「それは有難うございます。」と答えました。そしてその夜は、ジャックの素晴らしくおかしな話に大笑いしながら、スイスワインを楽しむとても素敵な一時を過ごしました。数年後私がジャックとたまたま出会ったときに、彼は、母はどうしてるか尋ねてくれました。あの同じ年しばらくして母が亡くなったことを言うと、ジャックはとても暖かな言葉をかけてくれました。

しかし、ジャック・ウォーデンにまつわる思い出は、もう一つちょっと面白い話があります。

60年代半ば、私の友人のベン・ギャザラが「ラン・フォー。ユアライフ」という番組をユニバーサルでやっている時のことです。ベニーは日曜の午後に、20世紀フォックス近くのチェヴィオットヒルズにある家で、飲み物やイタリア料理でもてなすオープンハウスパーティのようなものを開催していました。そのパーティーは、よく夜まで長引き、さらには翌朝までということもありました。

私が聞いた話はこうです、ジャック・ウォーデン、彼はベンの家で約12時間飲み、真夜中過ぎに出て、自分の車に乗り込んだあと、そこで眠ってしまいました。彼は警官にフラッシュライトを当てられ、身体を揺すられて起こされました。彼は酔いをさますために近くの留置所へ連れて行かれました。

夜明けに、ジャックは目を覚まし、大酒に酔ってその頭を冷やすために入れ

られた他の無頼漢たちとともに、自分が留置所にいることに気がつきました。ジャックの近くにいたそのうちの一人がなんとなく気づいたようで、「あんた、映画とかテレビに出てる人かい？」と尋ねました。

ジャックはぼんやりと頷きました。するとその男は、「ペキー・アン・ガーナーを知っているかい(ガーナーは40年代の可愛い子役で大人になるにつれ仕事がなくなりました)？」と尋ねました。ジャックが、それがどういうことになるのかわからずに、知っていると応えました。

すると、その男はちょっと誇らしく「俺、そこのメイドとやったの！」と告げたのです。

まあ、どんなに取るに足りないことでも、「誰もがショービジネスの世界にいたがった」古き時代の真実を証明するような出来事です。